

第19回
春日井市交響樂團
定期演奏會

2010年

7月4日(日)

開演15時(開場14時15分)

春日井市民會館



ごあいさつ



お祝いのことば

春日井市交響楽団
名誉会長

春日井市長
伊藤 太

大輪の花火が夜空を彩る季節に、第19回春日井市交響楽団定期演奏会が開催されますことを心よりお慶び申し上げます。

国際舞台で活躍される演奏家を招待し、学生と社会人により結成されたオーケストラが共演する本演奏会は、市民の皆様クラシック音楽を身近に親しんでいただく場として、また、本市の音楽文化の裾野を広げる場として、大変意義深いものであります。

このような貴楽団の活動は、文化とスポーツの振興を目指しております本市にとりまして、誠に心強く、関係の皆様方のご尽力に深く敬意を表す次第であります。

今回も、昨年の演奏会での情熱的で躍動感溢れる姿が印象的な濱津清仁氏の指揮のもと、欧州各国で活躍される水村さおり氏の繊細で緻密な変化に富んだピアノ演奏と管弦楽による洗練されたハーモニーが、観客の皆様を魅了することと期待しております。

最後に、本日の演奏会の成功と貴楽団のますますのご盛栄を心からご祈念申し上げ、お祝いのごことばとさせていただきます。



ごあいさつ

春日井市交響楽団
会長

中部大学 学監
三浦 昌夫

本日は、第19回春日井市交響楽団定期演奏会においていただきありがとうございます。日頃、私どもに多大のご支援をいただき感謝いたしております。常に、春日井市民のための交響楽団として活動をつづけておりますが、今回も、指揮者に濱津清仁さん、ソリストに水村さおりさんをお招きして、多くの市民のみなさまに「名曲の名演奏」をお聴きいただく機会を得ましたのは、大きな喜びです。特に、大編成のオーケストラによるチャイコフスキーの「悲愴交響曲」は、激しく力強い音楽を楽しむに思い出したみなさまのご期待に充分お応え出来るものと思います。そして、優雅なモーツァルトのピアノ協奏曲は、ここにしみじみとしみる美しさに満ちています。また、明るく華やかなウィナーワルツは、春日井市交響楽団が得意とするものです。本日の定期演奏会のために、団員が日々練習を重ねてまいりました。このおなじみの名曲の数々を、最後まで、どうぞごゆっくりお楽しみください。

また、今回から、花村浩克に代わり、稲垣徹が団長を務めることになりました。相変わらませぬご支援をあわせてお願いいたします。

プログラム Program

ヨハン・シュトラウス (1825~1899)
Johann Strauss II

円舞曲 「春の声」 作品410

Frühlingsstimmen

円舞曲 「美しく青きドナウ」 作品314

" An der schönen blauen Donau "

モーツァルト (1756~1791)
W.A.Mozart

ピアノ協奏曲 第26番 ニ長調 「戴冠式」 K537

Konzert D-Dur für Klavier und Orchester

第1楽章 Allegro : 快活に早く
第2楽章 Larghetto : ラルゴよりやや速く
第3楽章 Allegretto : 快活にやや速く

《休憩》 Intermission

チャイコフスキー (1840~1893)
P.I.Tschaikowsky

交響曲 第6番 「悲愴」 口短調 作品74

Symphonie Nr.6 h-moll Op.74

第1楽章 Adagio - Allegro non troppo - : ゆっくりと - あまり過度でなく快速に -
第2楽章 Allegro con grazia : 優美に、快速に
第3楽章 Allegro molto vivo : 快活にとても速く
第4楽章 Adagio lamentoso : ごくゆっくりと、哀悼的に

ピアノ独奏 水村 さおり

指揮 濱津 清仁

演奏 春日井市交響楽団

プロフィール



ピアノ独奏
水村 さおり

東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校を経て、同大学音楽学部器楽科入学。
1991年パリ国立高等音楽院に入学し、1994年同音楽院をブルミエルプリを得て卒業。同年、ジュネーブ国立音楽院大学院に入学、1997年、同大学院を榮譽ブルミエルプリ、特別賞を得て修了。

日本モーツァルトコンクール第2位、イタリア・カプリ島国際コンクール第1位、第5回国際モーツァルトコンクール・ディプロマ受賞。モーツァルト・ハイドン・コンチェルトコンクール第1位(スイス・ジュネーブ)第52回ジュネーブ国際コンクールディプロマ受賞(スイス)、ジャン＝フランセ国際コンクール第2位(フランス)、フランシス＝ブーランク国際コンクール第2位、およびブーランク賞受賞。第4回オルレアン20世紀国際ピアノコンクール第1位、併せてブーランク賞、ルーセル賞受賞。

1994年より国内にてリサイタル開催。またスイス・ロマンド管弦楽団をはじめとして国内外のオーケストラと多数共演。NHK-FM出演。

2003年、名古屋市民芸術祭受賞。

これまでに立川聖子、故 中島和彦、杉浦日出夫、播本三恵子、辛島輝治、ジョルジュ・ブリュデルマシェール、ドミニク・メルレの各氏に師事。またピアノフォルテをノトリック・コーエン氏に師事。

現在、中部大学講師。



指揮
濱津清仁

2004年ウィーン楽友協会黄金ホールにて、オーストリア・ウィーン放送交響楽団を指揮し、鮮烈な楽壇デビューを飾った新進気鋭の指揮者。幼少よりピアノ・ヴァイオリンを学び東京音楽大学ピアノ科に入学するも、後に指揮科に転科し1997年同大学を卒業。在学中より、オペラ・声楽付き作品への才能を示す。その後、渡欧し、ウィーン国立音楽大学指揮科に入学する。在学中より頭角を現し、主任教授レオポルド・ハーガーの許、管弦楽・オペラなど広範に亘るレパートリーを吸収し、ウィーン国立音楽大学主催公演に、ウィーン・プロ・アルテ管を指揮する。学内だけに留まらず、ルーマニア国立オラデアフィルの定期演奏会、ハンガリー・セグド管、Orchestra Haydn di Bolzano、Ensemble Zandonai Orchestra da Camera di Trento(イタリア)、Ensemble de l'Orchestra de Cadaques(スペイン)を指揮するなど活発な活動を展開し、特に自ら主宰したウィーンにおける”SAKURA”室内管弦楽団との活動も特筆される。ヨーロッパでの正統的な指揮教育を受けた濱津が紡ぎ出す音楽は、奇を衒わない解釈と清冽な響きに満たされ聴衆からの熱い支持を受けている。国内での活動にも取り組み、札幌交響楽団、名古屋フィルハーモニー交響楽団、セントラル愛知交響楽団、中部フィルハーモニー交響楽団、兵庫芸術文化センター管弦楽団などに登場した。

東京音楽大学指揮科、ウィーン国立音楽大学院指揮科をそれぞれ卒業。これまでに、レオポルド・ハーガー、エルヴィン・アッツェル、湯浅勇治、小澤征爾、秋山和慶、汐澤安彦、広上淳一に師事。

オーケストラ 春日井市交響楽団 *Kasugai City Philharmonic Orchestra*

春日井市交響楽団は、ベートーヴェンの「第九交響曲」の演奏会を春日井市で開きたいという市民の思いから生まれました。1990年(平成2年)11月に創立され、市内の音楽愛好家を中心に、「市民が演奏し・市民が聴く、春日井市民のオーケストラ」として活動を始めました。愛称「カポ」(KAPO)は英字名称「KASUGAI CITY PHILHARMONIC ORCHESTRA」の頭文字をとったもので、イタリア語の「カポ」(capo 頭・先頭に立つ者)の思いもあります。毎年、7月の定期演奏会と12月の「春日井市民第九演奏会」を中心に、数多くのオーケストラ活動を行っています。団員は、会社員・公務員・教員・医師・主婦・学生・自営業者などからなる45名。私たちににとって最大の喜びは、一人でも多くみなさまに演奏会においていただき、音楽を聴く喜びとともにクラシック音楽が好きになっていただくことです。そのために、「春日井で名曲の名演奏を」と心がけています。また、「春日井の開かれた音楽の窓」となって国の内外の最高の音楽家との共演にも努めています。これからも、さらに、市民のみなさまに親しまれ、愛されるカポとして、市民音楽活動をつづけて参ります。温かいご支援をお願いいたします。

音楽監督からのお話

良くお聴きいただくために

春日井市交響楽団は、春日井市民のための、春日井市民による、春日井市民のオーケストラです。そのために、毎年、7月の定期演奏会と12月の「春日井市民第九演奏会」で、市民のみなさまに喜んでいただける「名曲の名演奏」を行なっています。本日の第19回定期演奏会も、その思いを果たすものです。三人の偉大な作曲家の名曲を、濱津清仁さんの指揮、水村さおりさんのピアノ、春日井市交響楽団によって、「名演奏」となるべきものです。そのためにも、楽譜を入れておきましたので、一音一音、一小節一小節、一旋律一旋律を、「良く」お聴きいただければ幸いです。

春日井市交響楽団音楽監督 都築正道 (中部大学現代教育学部教授・音楽評論家)

ヨハン・シュトラウスのワルツ

ワルツの作曲家ヨハン・シュトラウス(1825-1899)は、父親もヨハン・シュトラウスですので、私たちは、父を「ワルツの父」、息子を「ヨハン・シュトラウス2世」とか「ワルツ王」と呼んで区別しています。この偉大な父子は、二人で数百曲ものワルツを書いたワルツの大成者であるばかりではなく、ウィーンで成功した最初のユダヤ人大音楽家でした。ヒットラーは、ヨハン・シュトラウスのワルツが大好きでしたので、この事実を隠しています。因みに、「ワルツの母」はだれでしょうか。そうです、ワルツの父の妻です。このワルツの父とワルツの母の間に、誕生した男の子が三人いました。ワルツ王が長男で、二人の弟も音楽家になりました。

昨年、ヨハン・シュトラウス2世の没後百十年の記念の年に当たります。800曲もの作品を書いた彼のことから、世界中でいくらくさん演奏され踊られてもびくともするものではありません。ワルツ王ヨハン・シュトラウスのそのワルツですが、都会風求愛の踊りで、男女二人が軽やかな靴を履いて優雅に踊る舞踊音楽です。これまでレントラーやコントラ・ダンスのような舞曲が、戸外や居酒屋で跳んだり跳ねたりしながらドタバタと激しく踊る粗野な民俗舞踊であったのと違って、ヨハン・シュトラウスのワルツは、美しく磨き上げられた舞踏室で足を優雅にスーッとすべらせながらしなやかに踊る、全く新しい紳士淑女の求愛の踊りでした。音楽も、分散和音の縦制りのメロディと角張った偶数拍子ではなく、甘い流れるような旋律と洒落た三拍子でできています。同じところでドンドンと足踏みをする悠長なものではなく、帆にいっぱい風を受けた船のようにスーッとすすむテンポの速い踊りです。力が入った作業歌を歌いながら踊る農民の共同体的な踊りではなく、都会風に洗練された愛する二人だけの情緒あふれる踊りです。しかし、現代的な若い人たちの情熱は、そんな優雅さや情緒はいりません。ただ抱き合って踊ればそれでいいのです。ヨハン・シュトラウスは、彼ら若者の期待に応じて、「速いワルツ」(シュネル・ワルツ)を書きました。余りにも速いので、だれもかピッタリと抱き合って踊らなければなりません。シュトラウスのワルツの人気の急速に高まりました。もともと、行き過ぎもあって、こういった男女がすごいスピードで踊る激しい踊りで死者が出たり、「男が女を無理矢理羽交いじめにしている」とみなされて、18世紀後半には禁止されたこともありましたが、でも、シュトラウスの時代の宰相メッテルニヒは、「踊りにすべてを忘れ、革命なんか考えないように」とワルツやポルカを大いに奨励しました。さすが、巧緻に長けたメッテルニヒですね。

ワルツ「春の声」・ワルツ「美しく青きドナウ」

ヨハン・シュトラウス
(1825-1899) 作曲

おなじみのワルツ「春の声」"Frühlingsstimmen" (1883)です。シュトラウスは、劇場支配人から、「宮廷歌劇場のコロラトゥーラ・ソプラノ歌手ピアンカ・ピアンチが、フランス皇帝ご夫妻のチャリティ・コンサートで歌うので、彼女のために、ワルツを書いて欲しい」と頼まれました。これまでに「青きドナウ」など、合唱入りのワルツで大成功をおさめていたシュトラウスでしたが、ソロ歌手のためのワルツは初めてなので、この新しい挑戦を喜んで引き受けました。歌詞は、オペレッタ「ヴェニス之夜」で一緒に仕事をしたりヒヤール・ジュネーが書きしました。まだ新作の構想がまとまらないとき、自作のオペレッタ「陽気な戦争」の初演にブダペストを訪れていたシュトラウスは、作家グスタフ・タルノジのサロンでリストと会いました。二人は30年来の仲だったので気楽に連弾を始めました。二人の即興的な連弾のあとで、リストがその家の夫人と二人で、また弾き始めました。即興的に色々なメロディが飛び交ったあとで、最後にシュトラウスがそれをワルツにまとめて弾きました — 「これは未発表の“ピアンカ・ワルツ”だよ」。前奏と三つのワルツとコーダで出来ています。もともと、このワルツ「春の声」は、ソプラノの独唱つきの管弦楽曲です。ある春日井市交響楽団の演奏会で、この「春の声」に私(都築)が作詞をして歌ってもらったことがありました。

ウィーンの街を流れるドナウ川は、ヨーロッパの八つの国(スイス・ドイツ・オーストリア・チェコスロヴァキア・ハンガリー・ユーゴスラヴィア・ルーマニア・ブルガリア)を通して黒海に注ぎ、全長2860kmあります。英語では「ダニューブ」、ハンガリー語では「ドナウ」、ルーマニア語では「ドゥナーリア」と呼ばれています。この「ワルツ:美しく青きドナウ」の原題は、"An der schönen, blauen Donau Walzer"で、川の名前は「ドナウ」になっています。

さて、1866年のことです。「プロシヤ・オーストリア戦争」が勃発しました。オーストリアは、宿敵プロシヤと戦ったのですが、わずか7週間で負けてしまいました。オーストリアの人々のショックは大きく、みんなは意気消沈してしまいました。「これではいけない、みんな、元気をだそうではないか」と呼びかけた人の一人に、ウィーン男声合唱団の指揮者のヨハン・ヘルベックがいました。彼は、ワルツ王ヨハン・シュトラウスに、「オーストリア国民を鼓舞するような素晴らしい音楽を書いてくれたまえ」と頼みました。シュトラウスは、詩人カール・ベックがドナウの美しさを讃えて歌った詩をもとに、詩人のゲルネルトに作詞を依頼してできたのが、男声合唱とオーケストラのためのこの「美しく青きドナウ」(An der shoenen, blauen Donau)です。1867年2月14日にヘルベックの指揮によりウィーンのディアナザールで初演されまし

た。この初演は、詩が余り良くなかったのか成功とはいえなかったようです。その年の夏、パリで開かれた万国博覧会に招かれたシュトラウスは、これをオーケストラだけの音楽に編曲して指揮をして、今度は大成功を収めました。このことを知っていたので、私(都築)も、春日井市交響楽団も加盟している愛環音楽連盟のイベントで、まったく新しい歌詞を作って合唱団に歌っていただきました。「良い歌詞ですね。だれの作詞ですか」と知らずに私に訊いてきた友人もいたほどで、これも、大変好評でした。

ピアノ協奏曲第26番「戴冠式」K537

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト
(1756-1791) 作曲

モーツァルトは、生涯にピアノ協奏曲を27曲書きました。特に12番以降のピアノ協奏曲はどれも珠玉の作品で、「良く」聴く人を感動と感激でつつまみます。特に、この第26番のピアノ協奏曲は、モーツァルト最晩年の円熟した作品の一つで、各楽章とも長調で、なによりも、美しく、明るく、陽気で、楽しく、リズムカルで、自由で、軽快で、天才モーツァルトの発想の天衣無縫さが魅力です。「戴冠式」という名前は、1790年にフランクフルトで挙行されたレオポルト2世の戴冠式を祝うもので、10月9日の戴冠式のあと、15日に開いたモーツァルト主催の演奏会で、モーツァルト自身がピアノを弾いて「初演」されました。しかし、事実は、2年前の1788年に作曲したもので、1789年にベルリン旅行の途中で寄ったドレスデンの宮廷で初演した既成の作品でした。今回の戴冠式用に、華やかで大きな音がする二つの楽器、トランペットとティンパニを新しく加えました。

ヨセフ2世の跡を継いだ弟のレオポルト2世は、音楽にあまり興味がなく、劇場支配人のローゼンベルクやサリエリやダ・ポンテも、辞めさせられたり、辞表を提出したりで、モーツァルトへの関心も極めて薄いものがありました。レオポルト2世はドイツ皇帝を兼ねていたので、フランクフルトでドイツ皇帝として即位するときにも、15人の宮廷楽団員にモーツァルトを加えることをしませんでした。この機会にあらためて自分を売り出そうと思っていたモーツァルトは、銀器を質に入れて自費で参加しました。結局は、当地で開いた自作演奏会も、たさんの催し物に押しされてお客が集まらず、失敗に終わりました。いつもながら、残ったのは疲労と絶望とたくさんの借金でした。

さて、水村さおりさんが弾く「戴冠式」協奏曲です。水村さんは、モーツァルトとフランス音楽をもっとも得意として、国際的な名声をもつピアニストです。音色はフランス風にあくまで澄んで美しく、その響きの豊かさはロココ風に甘美な魅力をはたえています。「モーツァルトの音楽は女性的だ」といわれるのは、「女性の感性をもって聴く音楽である」という意味です。女の人が花や宝石をためつすがめついつまで見てても飽きないように、美しいものに対して憧れを持ち、心を開いて、愛情を注ぎながら聴く音楽です。第1楽章の軽快な第1主題と半音階的と応答風の二つの第2主題。第2楽章の夢見のようなまどろみのラルゲット主題。第3楽章の飛び跳ねるロンド主題。まさにその女性の感性を必要とする。優しさと美しさにあふれた音楽で溢れています。水村さんは、その感性をもつピアニストです。

第1楽章 アレグロ ニ長調 4/4拍子 ソナタ形式。

【第1主題】



【第2主題A】

【第2主題B】



第2楽章 ラールゲット(遅く) 1長調 2/2拍子 三部形式。



第3楽章 アレグレット ニ長調 2/4拍子 ロンド形式。

